

織田作之助・作 道なき道 より抜粋

拝殿の前まで来ると、庄之助は賽銭を投げて、寿子に、

「日本一のヴァイオリン弾きになれますようにと、お祈りするんだぞ」と、言った。

寿子は言われた通り、小さな手を合わせて、

「日本一のヴァイオリン弾きになれますように」と呟いてから、

「——パパが見世物小屋へ連れて行ってくれますように」

そして、頭をあげて、ふと父親の方を見ると、庄之助はまだ頭を下げていた。そして何やら口の中でブツブツ言っていた。

拝殿では、白い着物を着て赤い袴をはいた二人の巫女が、一人は鈴を持ち、一人は刀を持って踊っていた。

庄之助はまだ拝んでいる。寿子はふっとおかしくなって、

「パパは何をお祈りしているのやろ？」

と、肚の中で呟いた。

庄之助は何を祈っているのだろうか。

——彼は大阪では少しは人に知られたヴァイオリン弾きであったが、年中貧乏していた。「津路ヴァイオリン教授所」の看板を掛けているのだが、偏屈なのと、稽古が無茶苦茶にはげし過ぎるので、弟子は皆寄りつかなくなって、従って収入も少なかったのである。

ヴァイオリンなど艶歌師の弾くものだと思いきんでいた親戚の者たちは、庄之助に忠告して、

「ヴァイオリンみたいなもの廃めてしめて、何ぞ地道な商売をしたらどないや」

と言うのだったが、きかなかつた。そして相変わらず「津路式教授法」と自称するきびしい教授法を守りながら、貧乏ぐらしを続けるのだった。

ところが、去年の秋、俗に赤新聞とよばれている大阪日日新聞の音楽コンクールで、彼の三人の弟子たちが三人とも殆ど最高点に近い成績を取った。

「それ見ろ」

と庄之助は呟いた。

「——世間の教師らはヴァイオリンの教授を坊ちゃん嬢ちゃん相手の機嫌取り同然に思っているが、俺の弟子はきびしい教え方のおかげで、皆んな良い成績を取ったではないか」

これで永年の自分の主義も少しは報いられたというものだ、これからはもう自分の天下だ、弟子もふえるだろう、いや門前市をなすかも知れないと、彼は喜んだ。ところがそのコンクールはかえって「津路の稽古はきびし過ぎる、あんな稽古をやられては助からぬ」というこれまでの悪評に、ますます拍車を掛け

るような結果になった。誰も彼も庄之助の塾を敬遠した。そして弟子は減る一方で、塾はさびれ、彼の暮らしは一層みじめなものになった。

そこで彼は、土地の軍楽隊に籍を置いたり、けちな管弦楽団の臨時雇の指揮をしたりして、口を糊へりながら、娘の寿子を殆ど唯一人の弟子にして「津路式教授法」のせめてものはけ口を、幼い寿子に見出して来たのであった。

ところが、今日、寿子が弾いた「チゴイネルヴァイゼン」の素晴しさは、庄之助を驚かせた。それは天才的な閃きといってもいい位であった。

「ごりゃ、もしかしたら大物になるかも知れないぞ」

と彼は思った。すると、元来熱狂し易い彼は、寿子を大物にするために、すべてを犠牲にしようと思っ

た。彼はヴァイオリン弾きとしての自分の恵まれぬ境遇を振りかえってみた。そして、自分の音楽への情熱

と夢を、娘の寿子によって表現しようと、決心したのである。

「——そのためには、軍楽隊もやめます。指揮もやめます。そして、私の生活のすべてを犠牲にして、道なき道を歩みながら、寿子を日本一のヴァイオリン弾きに仕込みます」

氏神の前にそう誓ったのである。

2006年7月25日作成

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。